

選者 川口孤舟

投句・選句

柿崎忠彦 熊谷くにお 川口孤舟 久米五郎太 小早健介 後藤とみ子 在間千恵

佐藤ただしげ 田島正己 土谷堂哉 福島正明 古川百合子 古田昇 星田啓子

山崎亜也 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ

梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章 山本三恵

◇青葉会は 俳句にご興味をお持ちの方のご入会を“いつでも”お待ちしております!!

お気軽に下記にてご連絡を!

連絡先 Mail: aobakai.mc@gmail.com



【互選句】 ◎が付されている句は孤舟選者の選

○は選句した会員による天(特選)

十点

◎遠花火過ぎし日想ふ文の束

とみ子

(孤・忠・千・龍・清・己・百・啓・三・盛)

九点

継ぎはぎの岐阜提灯や父母送る

正明

(く・くす・孝・己・堂・百・亜・天・盛)

八点

◎老ひてなほときめきを知る夏の夜

盛雄

(孤・忠・健・た・龍・孝・け・三)

七点

ほうたるに漆黒の夜を明け渡す

孤舟

(五・と・清・堂・己・允・昇)

◎猛暑とて千年の古都コンチキチン

盛雄

(孤・千・○龍・隆・正・亜・け)

六点

星祭熟女二人の赤ワイン

千恵

(くす・忠・く・孝・隆・正)

五点

◎夕焼けて西方浄土かも知れず

昇

(孤・○くす・忠・千・○孝)

四点

歌袋絶えず震はせ牛蛙

孤舟

(五・と・千・天)

夏の海かつてここより浦塩へ

五郎太

(健・と・堂・啓)

夏日燃ゆ兵糧攻めにあひし城

全

(くす・千・孝・昇)

(太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔)

五十万の御霊の無念夏の雲

全

(清・堂・隆・盛)

◎焼石に水と言ひつつ水を打つ
スコールの晴れ間に南十字星
夏の陽に明るき仏間母の笑み
脳外科のコメントを待ち夏を生く

昇 全 啓子 盛雄
(孤・允・百・天)
(く・〇健・允・け)
(くす・た・〇孝・百)
(忠・健・清・正)

三点

孫が書く小さな願い星祭り
草矢打つ少年の目に愁ひかな
中京(なかがきょう)に二階囃子の流れゆく
唐の妃にライチを運ぶ夏の霜

忠彦 全 啓子 盛雄
(龍・清・允)
(五・と・啓)
(と・た・〇昇)
(健・孝・昇)
(孤・正・〇盛)
(忠・千・盛)
(く・清・允)
(くす・孝・堂)
(堂・百・天)
(く・亜・け)
(五・己・啓)
(孝・〇三・盛)

◎半世紀経て再会や焼酎酌む

蛸食べて無病息災半夏生

夕景も肴に浜の夏料理

梅雨明けや波照間島の光る海

青蚊帳は遊び場なりし里の古家

真夜中の道路工事や星涼し

青梅雨の音きくばかり坐禅堂

朝刊を読む目の端に僅咲く

昇 全 啓子 盛雄
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)
(五・百)
(隆・三)
(啓・亜)
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)

二点

天突で押し出しするり心太
鰻食ぶ惻隠の情抱きつつ

風死して潮香かぶさるベイエリア

◎とびきりの昭和よ武相荘涼し

◎A Iも答えに窮す汗たたり

古本に惹かれ長居の夜店かな

今年の蚊羽音よわくて瘦せており

梅雨明けやうれしさよりも悲愴感

「お代わり」と八十路四人の生ビール

◎若者の汗美しきボランティア

清流も濁りて下る梅雨最中

◎刺青とタトゥーのあはひサングラス

忠彦 全 啓子 盛雄
(五・百)
(隆・三)
(啓・亜)
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)
(五・百)
(隆・三)
(啓・亜)
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)

一点

◎香水が好きな美輪様亡くなりぬ
実梅擁ぐ背に夕陽を受けながら
海亀の滂沱の泪月の夜

留学の娘の荷を解くや夏休み

涼み台家族それぞれ好きな位置

ハラハラと虎が涙や富士裾野

鉢植えの朝顔のつる鉢巻きに

旅に発つ妻のメモあり「冷蔵庫」

忠彦 全 啓子 盛雄
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)
(五・百)
(隆・三)
(啓・亜)
(孤・〇と)
(孤・正)
(健・孝)
(天・三)
(た・亜)
(正・け)
(孤・く)
(た・己)
(孤・啓)

二人目の女の曾孫夏の空
 草刈るも雨のち晴れておい繋る
 孤を描きミサイル飛ぶ地芥子の花
 名付けたる和菓子に季語や雲の峰
 夏雲や椰子そここに逗子葉山
 走馬灯見し記憶すら懐かしき
 百日紅咲きて始まるあへぐ日々
 ◎夏入院足かけ三月飽き飽きし
 負けて知る綱の矜持や名古屋場所

正明 (龍)
 百合子 (た)
 啓子 (己)
 全 (隆)
 全 (け)
 全 (己)
 天牛 (孤)
 盛雄 (亜)



【選評・短評】

十点

遠花火過ぎし日想ふ文の束

とみ子

孤舟選者・・・旧い手紙に微かで遙かな記憶が蘇る。
 千恵さん・・・今でも受け取った手紙を手元に残してあるなんて・・・
 龍平さん・・・年と共に遠い昔事が懐かしくなり 価値の有る重みを増す。
 百合子さん・・・遠花火と過ぎし日が呼応して、文の束に詰まった想いが伝わって来ました。

九点

継ぎはぎの岐阜提灯や父母送る

正明

堂哉さん・・・我が家のもだいぶくたびれてきました。毎年、組み立て方を思い出しながら、豆球が点灯するとやれやれです
 百合子さん・・・『継ぎはぎ』の一言で消し難い思い出の詰まった岐阜提灯と理解しました。
 亜也さん・・・旧家の景を想像。「継ぎはぎ」が亡き方々へのしみじみとした思いを伝えて哀切。
 天牛さん・・・何代続いた岐阜提灯でしょうか。親孝行ですね。

八点

老ひてなほときめきを知る夏の夜

盛雄

孤舟選者・・・老人こそときめきをもつて生きたいもの。 注…老ひ ↓ 老い
 ただしげさん・・・この気持ち良く理解できる。

七点

ほうたるに漆黒の夜を明け渡す

孤舟

五郎太さん・・・大袈裟なのがなんともいいですね。暗闇に急に蛍が飛んできたのか、蛍のいる川辺に出たのでしょうか。
 とみ子さん・・・漆黒の夜に 蛍の乱舞が見えるよう。お上手なお句と感心しました。
 堂哉さん・・・中七、下五に感服しました。
 允章さん・・・空に飛び交うホタル以外、何も見えない暗闇。
 昇さん・・・漆黒の夜の主役は蛍。幻想的な光景です。

猛暑とて千年の古都コンチキチン

盛雄

孤舟選者…… 祇園祭は「暑さ」も伝統として引き継がれている。

千恵さん…… 千年以上続く祭りは猛暑などには邪魔されません。京都人のプライド。コンチキチンです！

龍平さん…… 次男坊が京都で起業した旅行会社が この夏13年目を迎え社の提灯を作製 祇園祭に参加行進した。〈コンチキチン コンチキチン〉これが これから1000年も続くことを祈りたい。

隆さん…… 京の暑さは格別とか。「コンチキチン京の暑さを吹き飛ばす」。
亜也さん…… このヤケクソ感がなんともいい。

六点

星祭熟女二人の赤ワイン

千恵

隆さん…… 二人なら「淑女」がいい。こんな平和が長く続いて欲しい。国民の努力次第だが。

五点

夕焼けて西方浄土かも知れず

昇

孤舟選者…… 西方極楽は茜色の世界なのであろう。

千恵さん…… 茜色に染まった空は明日への希望とかなんとかを感じますね。

四点

歌袋絶えず震はせ牛蛙

孤舟

五郎太さん…… 食用の外來種だとか。大きな鳴き声は、美しい歌には程遠い感じです。歌袋というのがいいですね。

とみ子さん…… あの響きわたる牛蛙の鳴き声は 歌袋のせいですか。知りませんでした。

千恵さん…… 歌袋の優雅な存在を知りました。それが蛙の喉の器官と同じ呼び名とは！

天牛さん…… 我が家もあちこちで鳴いています。どこで震はせているのでしょうかね。

夏の海かつてここより浦塩へ

五郎太

健介さん…… かつて日本海側のどこかの港から、ウラジオストックへ航海した歴史のお話なのでしよう。浅学の身の悲しさ、内容は判りませんが、何か深い意味を感じました。

とみ子さん…… 夫の祖父が嘗て ウラジオストックで貿易商をしていました。商館が今も地図に残っています。昔々のはなしです。

堂哉さん…… 父は終戦間際に日本海をわたり、結局シベリアに抑留されました。82年二月に帰

国できましたので、私は気楽な人生を歩むことが出来ました。

夏日燃ゆ兵糧攻めにあひし城

五郎太

千恵さん…… 多分今や石垣のみ残る城で哀愁が漂うのです。

昇さん…… 季語の幹旋が兵糧攻めの過酷さを彷彿させます。

(太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔)

五十万の御霊の無念夏の雲

五郎太

隆さん…… 戦没者追悼の夏がきた。戦争の火種は厳に慎むべき。

盛雄さん…… 夏が来ると思い出す句。忘れられない「八月は六日九日十五日」。

焼石に水と言ひつつ水を打つ

昇

孤舟選者……効果が無いと解りながらも他の手立てがないもどかしさ。

允章さん……どうにもならない暑さ。

百合子さん……切実さとユーモアが相俟って思わずくすり、いい一句と思いました。

天牛さん……昨今四十度とか言って騒いでいます。上手いですね。

スコールの晴れ間に南十字星

昇

健介さん……南十字星を見つけるのは難しいですが、南方で暮らしていた時、発見して大喜びをしたことがあります。

允章さん……小学生の頃、夜の校庭で理科の先生がさまざまな星を教えてくださいました。

夏の陽に明るき仏間母の笑み

啓子

ただしげさん……お母さんに対する気持ちがほのかに伝わって来る。

孝岳さん……夏の陽だまりの中、仏間の写真の母を懐かしく思い出している。その穏やかで幸せな時間。

百合子さん……穏やかなお母さまの笑みに、なごむ気持ちと一抹の寂しさを感じました。

三点

孫が書く小さな願い星祭り

忠彦

龍平さん……星は何でも知っているから？

允章さん……何ともかわいい孫

草矢打つ少年の目に愁ひかな

くにお

五郎太さん……季語になっている「草矢」、初めて見ました。

とみ子さん……理由は分かりませんが、好きな句です。

中京(なかぎょう)に二階囃子の流れゆく

五郎太

とみ子さん：祇園囃子のお稽古にも 情緒がありますね。京都人でなくても心弾むように感じます。ただしげさん：祇園祭の風景を面白く表現している。

昇さん……祇園囃子の練習の熱気が伝わって来ます。今年は特に熱中症に要注意！

半世紀経て再会や焼酎酌む

千恵

孤舟選者……50年振りで再会の幼友達。長年熟成された焼酎が似合う。

允章さん……お互いに年をとったな。

盛雄さん……五十年ぶりの高校の同窓会でしようか。盃を重ねるうちに当時を思い出す。下五が愉しい一句。

蛸食べて無病息災半夏生

ただしげ

千恵さん……昔の人の「こじつけ」や習慣が楽しく大事にしたいですね。

盛雄さん……これは愉しい。面白い佳句です。

夕景も肴に浜の夏料理

堂哉

允章さん……大ジョッキでビールが殊のほか旨い。

梅雨明けや波照間島の光る海

昇

堂哉さん……浜辺でのんびりしたいです！

真夜中の道路工事や星涼し

正己

亜也さん……殺風景なものに詩情を見出すユニークさ。

青梅雨の音きくばかり坐禅堂

くにお

五郎太さん……静謐な句。座禅は無心にならねば。

朝刊を読む目の端に僅咲く

啓子

盛雄さん・・・日常のひと時。時間が詠み込まれている。

三恵さん・・・到底シンクロしそうな素材で、日常の瞬間をとらえているところが面白いです。

僅は、はなやかですが、儚い印象がありますね。好きな花の一つです。

青蚊帳は遊び場なりし里の古家

正己

堂哉さん・・・先日NHKテレビでタモリが蚊帳に入っているのを観ました。あれこれと思い出ししました。

百合子さん・・・蚊帳を吊り終った途端「待ってました！」とばかりに出たり入ったりしてよく遊びましたが、何が楽しかったのか？

天牛さん・・・もはや九十年前ですが、妹たちと水泳ごっこをして遊んだものです。

二点

天突で押し出しするり心太

忠彦

五郎太さん・・・甘党ではないのですが、最近は冷蔵庫ではもっぱら水羊羹を冷やしています。

百合子さん・・・あの押し出す瞬間の達成感が爽快で、やらせて！と何回も、家族の風景が蘇って来ました。

風死して潮香かぶさるベイエリア

とみ子

啓子さん・・・風。海に近い街中にも潮の香りが漂います。季語の斡旋で暑苦しさが増して。

亜也さん・・・都会の街並みにあっても、ふと気付かせる嗅覚の不思議。

とびきりの昭和よ武相荘涼し

千恵

孤舟選者・・・戦後の昭和史が大きく動いた現場。

とみ子さん・・・「とびきり」のひとりで、武相荘の趣きのある雰囲気想像出来ます。

AIも答えに窮す汗たらり

千恵

孤舟選者・・・AIも完璧ではなく冷汗ものの時も。

今年の蚊羽音よわくて痩せており

百合子

天牛さん・・・大変な昆虫学者ですね。驚きました。

梅雨明けやうれしさよりも悲愴感

百合子

ただしげさん・・・今年の日候の移り変わりを上手に表現している。

亜也さん・・・始まる酷暑、お互いなんとか凌ぎましょう。

若者の汗美しきボランテア

昇

孤舟選者・・・災害復旧に集まったボランテアの若者は頼もしい。

刺青とタトゥーのあはひサングラス

亜也

孤舟選者・・・刺青とタトゥーの違いはサングラス越しでは分からない？

啓子さん・・・現代では急速に刺青とタトゥーの違いが曖昧に。別の意味で読んでも、サングラスは市民権を得ましたね。

一点

香水が好きな美輪様亡くなりぬ

忠彦

孤舟選者・・・独特な美意識を持った見事な生き様だった。

涼み台家族それぞれ好きな位置

とみ子

五郎太さん・・・お宅でしょうか、エアコンのある場所にみんなが集まっているわけでもないようです。

上手ですね。

ハラハラと虎が涙や富士裾野

ただしげ

昇さん・・・曾我兄弟の仇討ちの哀話。亡き曾我十郎を想う虎御前の悲涙は幾ばかりか。

鉢植えの朝顔のつる鉢巻きに

ただしげ

隆さん・・・「朝顔のつる鉢巻きに威勢よく」。今年は、朝顔市（鬼子母神）、鬼灯市（浅草寺）に
お参りした。「ほほづきの橙色や初盆会」。

旅に発つ妻のメモあり「冷蔵庫」

堂哉

天牛さん・・・旅でなくても、外出時の指示は冷蔵庫にあるから食べて下さいですね。

二人目の女の曾孫夏の空

正明

龍平さん・・・「夏の空」の意を知りたし

草刈るも雨のち晴れておい繋る

百合子

ただしげさん・刈っても刈っても気持ちがよく分る。

名付けたる和菓子に季語や雲の峰

啓子

隆さん・・・「和菓子屋の棚を彩る雲の峰」。甘党は雲の峰の味が気になるところ。

百日紅咲きて始まるあへぐ日々

亜也

龍平さん・・・あの花なら // 茹だる、でもイケるのでは？

夏入院足かけ三月飽き飽きし

天牛

孤舟選者・・・気持ちは痛いほど分る。一日も早いご退院を。

負けて知る綱の矜持や名古屋場所

盛雄

亜也さん・・・同情、応援、はたまた叱責？



【次回青葉会予定】

八月青葉会 八月二十七日(木) 誌上選句会です。

☆ご出句について 八月二十二日(土)を締め切りと致します。

通常句会ご出席の方も、ご投句の方も、七月同様、二句く五句 をご投句下さい。
☆誌上句会のため、二十七日午前中に皆様へ「選句表」を送信致します。

※郵送の方には二十七日にはお手許に届くよう発送します。

通常は選句だけでご参加のかたも是非たまには一句捻ってみて頂戴できましたら
嬉しく有難く選句に入れさせていただきます。奮ってご参加下さい。

☆選句締切日 9月5日(土)を選句締切日と致します。

結果の句会報の発行は、九月十日(木)を予定致します。

九月青葉会 九月二十四日(木) 午後一時く 定例句会です

例会・・世田谷区三軒茶屋 世田谷区施設 しやれなあど 6階 ビーナスの間です。

☆ご出句について 九月十九日(土)を締め切りと致します。

通常句会になりますので、ご参加の方には5句、ご投句の方には二句から三句を
目処としてご投句下さい。



【青葉会報】

一、今回は猛暑の時期として、従来は八月のみだった誌上句会を、七月もと共に誌上句会と致しました。皆様にはご出句について同条件として二句から五句まで、としたところ、数名の方が五句お出し下さいました。有難うございました。皆様からは今月も佳句が多く選句に迷いましたという感想を多く頂戴しております。

二、結果はご覧の通りで、最上位十点は とみ子さん。いつも生活の景を巧みに切り取り、優しい目線で俳句を作られます。お人柄が分かるようです。次点九点は正明さんで、時事句をはじめ広い範囲の作句をされます。今回は生活の行事での思い。お盆でご両親様の頃からお使いだったらしい岐阜提灯に想いを託されて。三番手八点には、関西の盛雄さん。関西でも時に毎日新聞・兵庫文芸に取り上げられるなど俳句のベテランです。

三、このたび新執行体制で社友会と協力継続について確認致しました。

毎月の句会報と会報は社友会の会員を対象としたホームページに掲載されます。ただ、そのサイトは従来より外部からもアクセスできることから、これまでと同様に句会報や句報に掲載する皆様のコメントは、その点を意識して投稿して頂きたくお願い致します。句会報編集時には、必要に応じて書き手の方と連絡を取りつつ、編集段階で手を加えさせて戴くこともあるかと存じます。ご理解くださいませ。

☆☆☆☆

【故西澤國護さん（令和八年六月十二日ご逝去） 追悼の言葉 追悼句】

青葉会句会にて出句された國護さんの句の内、句友の支持を得た句をいくつかご紹介致します。

見通しのきく影となり冬木立

庭の柚子もぎたて香る夕支度

浮き雲の白さ軽さも秋の空

賀状書く毎年減るも心籠め

夏帽子かなりに若さ取り戻し

紫陽花に濃き青残し通り雨

青葉会の句友であり代表でもある 久米五郎太さんから追悼のことばを頂戴致しました。

西澤國護さんが六月に病気で亡くなられた。享年八十歳、私の半年後の生まれ、春まで出句、選句を共にしていただけたに、驚き、悲しみも大きい。

「この歳から俳句をやるが、遅すぎますかと」と言って青葉会に入ってきたのが2022年三月。始めのうちは美しい花や景色、美味を詠みたいと、かなり苦勞をされていた。それが2025年の秋頃には「見通しのきく影となり冬木立」などの秀句を作る。風景や空など自然の捉え方が上手であった。

長野県松本市出身、ご実家は我々の世代が使ったスキー板NISHIZAWAを製作していた。ご本人によれば、元は書店、江戸時代には出版もやっていた由。

丸紅の繊維部門出身、ミラノ駐在中はアルプスでスキーを。句会中はあまり多くを喋らなかったが、忘年句会で小喃を披露されたこともある。瘦身長軀で、お洒落でもあった。

ご冥福をお祈りいたします。

（五郎太）

追悼句

またひとり句友が夏の星となる	孤舟
山並の夏日に浮かび影と消ゆ	五郎太
蓮の花ポロシヤツ似合う句友逝く	千恵
薨や句を残し逝く野辺の道	隆
小咄の亡き人偲ぶ梅雨の闇	昇
呼び慣れし俳号儚く梅雨最中	啓子
少年の心保ちて夏に逝く	亜也

このほか多くの句友から、俳句を共に愛する者として

句友が居られなくなることは大変寂しい。ここからご冥福をお祈り致します。

とのお言葉を頂いております。

令和八年八月十日

(了)